



Title	バークリと「経験」概念
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	哲学論叢. 1987, 18, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66850">https://doi.org/10.18910/66850</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# バークリーと「経験」概念

中 谷 隆 雄

## 一 ロックの「経験」

経験という言葉 자체、バークリーの哲学的主著『原理』あるいは『対話』にあまり現れない。しかも、「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除く」試みとされる物質論批判<sup>(2)</sup>、抽象観念批判<sup>(3)</sup>のコンテキストに「経験」は全く現れない。特に前者にかかわっているのは「知覚」であって「経験」ではない。

バークリーはロックを批判するに際して、「経験」という語を必要としていない。それでももしバークリーが「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除いて」いるとすれば、「経験」という言葉の意味について反省する必要がある。ロックは、経験論を提唱するも(II, i, 2)、すべての知識は経験によって得られる、と言つているわけではない。経験によって得られるのは、すべての知識ではなく、知識のすべての素材である。知識というのは観念の一致不一致の知覚(IV, i, 2)なので、観念が知識の素材になる。つまり、すべての観念は経験によって得られる、とロックは言つているのである。<sup>(4)</sup>この「経験」は「感覚と内省」に置き換えることができるようと思われる。<sup>(5)</sup>

ロックは観念を単純観念と複雑観念に分けているが、そこからそれは言える。単純観念は感覚と内省に由来していゝ（II, ii, 2 ; cf. i, 3f.）」、複雑観念（様相、実体、関係）（II, xii, 3）も単純観念から形成される限り、究極的には、感覚と内省に由来していゝ（II, xii, 8）からである。

「経験」を「感覚と内省」の総称と解釈すれば、バークリーは「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除く」試みを行つたことになる。不整合とは、『観念は経験によつて得られる』という命題と『物質的実体は存在する』という命題の間のことである。前者が経験論であり、後者が経験論と「整合的でない要素」である。」」では心の外に存在する物質的実体が主題なので、「経験」から「内省」は省かれる。経験論というのは、」」では、「観念は究極的には感覚に由来する」という考え方——いわば感覚主義になる。<sup>(6)</sup> バークリーは感覚主義の側に立つて、独自のやり方で不整合を解消する。つまり、「存在する」という言葉の意味を考察して、それが「感官によつて知覚される」という意味になることを発見し、<sup>(7)</sup> esse is percipi（存在するとは知覚される）ことである」という原理を確立する。そしてその原理を物質に適用して知覚されざりに存在する「物質」概念は矛盾であると宣告するわけである。

要するに、ロックの経験論の支配下に、バークリーは esse is percipi を発見し、「ロックの哲学から経験論と整合的でない要素を取り除く」べく努めたことになる。ただ、いゝまでの「経験」は「感覚と内省」ある」は「感覚」以上のもではない。ロックにはまた別の「経験」がある。それは判断と知覚の関係を論ずる箇所に現れる。<sup>(10)</sup>

例えば、均等な色の球体を前にしたとき、私達が実際に知覚しているのは不均等な色をした円形の平面である。にもかかわらず、私達は均等な色の球体があると判断する。」」のような判断を可能にしていゝのは「慣れ（use）」

あるいは「不斷の習慣 (habitual custom)」である、とロックは語る。このいとをより明確にするために、ロックは知人のモリニューカスが考察した問題を取り上げる。

「生來の盲目で現在成人のひとがいて、そのひとは、同じ金属で出来たほぼ同じ大きさの立方体と球体を触覚によつて区別することを教えられ、その各々に触れたとき、どちらが立方体でどちらが球体かを言える。そう想定しよう。さらに、テーブルに立方体と球体が置かれ、そしてその盲人が視力を得たと仮定しよう。そこで問いたい。そのとき、それらに触れる前に、彼は視覚によつてどちらが球体でどちらが立方体かを区別し、そしてそのことを語らうことができるのかどうか。」(II, ix, 8)

この問題に対し、モリニューカス自身は次の様に答えていた。

「できない。なぜなら、彼は、いかにして球体が、そしていかにして立方体が触覚に作用を及ぼすかという経験はしているが、触覚にかくかくの作用を及ぼすものは視覚にかくかくの作用を及ぼすに違いないという経験、つまり手を不均等に圧する立方体の角は、実際立方体で現れる通りに、眼に現れるはずだという経験をしていないからである。」(同) (傍点筆者、以下同様)

ロックはモリニューカスのこの答えを支持し、「読者は、経験、改善(improvement)、~~獲得された概念~~ acquired notions)を少しも利用しない、あるいはその恩恵に浴さないと思つてゐるけれども」、上の様な問題を考えるといふは、「どれくらい多くそれらに助けられているか」(II, ix, 8)を反省する機会になる、と語る。この経験には單なる感覚や内省にない特徴がある。その特徴は『知性論』のこの節から、少なくとも三つ指摘することができる。

①それは判断を可能にする。

(11)

不均等な色をした円形の平面を私達は均等な色の球体と判断する。それは、「凸面の物体が私達のうちに常にどういう外観を呈するのか」、即ち「物体の可感的な違いによって光の反射にどういう変化が引き起こされるのか」という経験をしているからである（同）。生來の盲人も、触覚でなら立方体と球体の区別はできる。それもまた、「いかにして球体が、そして立方体が触覚に作用を及ぼすか」という経験」をしているからである。

②それが判断を可能にしていることは気付かれない。

経験が判断を可能にしていても、人々は経験を「少しも利用しないと、あるいはその恩恵に浴さないと思つて」る」。働いていても気付かれない。これも「経験」の特徴である。<sup>(12)</sup>

③それは反復によって形成される。

凸面の物体が私達のうちに呈する外観、あるいは物体の可感的な形の違いが引き起こす変化を単に知覚しただけでは、判断を可能にする経験は形成されない。経験が形成されるためには、そういう外観、そういう変化を「知覚することになじんで」（同）いなくてはならない。「なじむ」ためには、それらを反復して知覚する他ない。それが「慣れ」であり「不斷の習慣」である。盲人の例についても同じことが言える。

以上の三つの特徴を持つ「経験」の概念が、バークリイに於ても、ひとつ一つの役目を果たすことになる。

## 一 バークリイの「経験」

ロックの物質論、あるいは抽象観念説を批判する一方で、バークリイがロックに賛意を表しているところが『新論』にある。そこでは、モリニュークスに同意するロックの文が引用され、それはバークリイの「教義(tenet)」をさらに

確証するもの」 とならじる (§ 132, 133)。

可視的 (visible) な四角と可触的 (tangible) な四角が数的に (in numero) のみ異なっていて、種的には (specifically) 異なっていないとすれば、視力を得た盲人はどちらが立方体でどちらが球体かを視覚のみによつて知るゝことができるはずである。しかし彼は視覚のみによつては立方体と球体が区別できない。それゆえ、可視的な四角あるいは円と可触的な四角あるいは円は数的にのみならず、種的にも異なつていなくてはならない。そうバークリイは論じる。従つて、バークリイが依つて立つ「教義」は次の二つになら。

(n) いかなる事物についても、視覚の対象となつてゐるものと触覚の対象となつてゐものは数的に別個である。

(s) いかなる事物についても、視覚の対象となつてゐるものと触覚の対象となつてゐものは種的に別個である。

### バークリイと「経験」概念

- (n) の証明のために、バークリイは「月」の例を用いている。<sup>(13)</sup> 月を見て、『それは私から遠く離れている』と言つたとき、それは「小さくて光る平面」(可視的な月)について言われてゐるのではない。「小さくて光る平面」は、私がそれへと向かへて移動すれば、変化し、遂には消えてしまふ。そこで言われてゐる月はむしろ巨大で不变なものである。そうバークリイは考える。これを(n)の証明としてペラフレーズすれば、次の様にならう。<sup>(14)</sup>
- (i) もし私が見て いるもの——可視的対象が、私から遠く離れた対象と同一であれば、私が移動しても、それは変化しないはずである。
- (ii) なぜなら、私から遠く離れた対象は、私が移動したからといへ、変化するとはないからである。

(iii) ところが、私が移動すれば、可視的対象は常に変化する。

(iv) ゆえに、可視的対象と遠く離れた対象は同一でない。

(v) 遠く離れた対象は触れる事のできる対象——可触的対象である。

(vi) 従つて、可視的対象と可触的対象は数的に同一でない〔(v)〕。

(s) の証明<sup>(15)</sup>は、バークリーの記述 (§ 129, 130) をパラフレーズすると、次の様になるはずである。

(i) 色は視覚によって知覚される (§ 130)。

(ii) 色は触覚によって知覚されない (§ 129)。

(iii) 可触的対象は触覚によって知覚される。

(iv) 可触的対象は視覚によって知覚されない (§ 130)。

(v) 色以外に可視的対象はない (§ 130)。

(vi) ゆえに、可視的対象と可触的対象は種的に異なる<sup>(16)</sup>〔(s)〕。

この結論(s)を「やらないに確証するもの」としてバークリーはモリニューケス問題に言及した。もし視覚の対象と触覚の対象が数的にのみ異なる〔(ii)〕のなら、視力を得た盲人は立方体と球体を区別し、どちらが立方体でどちらが球体か言えるはずである。しかし彼にはそれが言えない。それゆえ視覚の対象と触覚の対象は種的にも異なる〔(n)〕と想定せざるを得ない。<sup>(19)</sup>

かくして視覚の対象と触覚の対象は数的かつ種的に別個となる。ただ『新論』ではバークリーはこの二種の対象を視覚観念および触覚観念と呼ぶ。<sup>(20)</sup> この互いに数的かつ種的に別個な「視覚観念」および「触覚観念」と、そして

「経験」概念を用いて、バークリーは『新論』で奥行き、大きさ、位置<sup>(21)</sup>、<sup>(22)</sup>、<sup>(23)</sup>を分析する。なかでも、奥行きについては、ロックの影響は両観念の峻別と「経験」概念にどいまいがない。ロックがモリニュークス問題を持ち出したのは、いかにして不均等な色をした円形の平面を均等な色の球体と判断するようになるかを説明するためである。言い換えれば、凹凸のないもの（視覚観念）をなぜ凹凸のあるもの（触覚観念）と判断するかを説明するためである。そしてその説明のために視覚と触覚の経験に訴えざるを得なくなつた。<sup>(24)</sup> いふからバークリーの「奥行き」論への道程はそう長くない。「色の多様にすがや」（『新論』§158）奥行きのない視覚観念のうちに私達はいかにして奥行きがあると判断するようになるか、ところのがバークリーの「奥行き」論だからである。

『新論』(1709)の「経験」によつて、『原理』(1710)で世界の実在性が物質抜きに裏付けられることになる。物質を消去したバークリーは、私達の世界が実在的であるとの拠り所を観念に求める。そして拠り所のひとつのして、「定常性、秩序、そして一貫性」という観念間の特性を挙げる。それらは「自然の法則」と呼ばれ、学ばのに経験を要する(§30, 31)。また、「経験」は「一般的な名前(general name)」についての説を支える。バークリーによれば、「言葉ところのが一般的となるのは、抽象観念の記号ではなく、複数の個別観念の記号となつて、そのどれをも無差別に心に示唆する」(intro. §11, cf. §12)。言葉が複数の個別観念の「これをも無差別に心に示唆する」ようになるには、(バークリー自身明言していないが)経験が要る。

かいは「経験」によつて、『対話』(1713)で間接知覚の説が展開される(p.204)。直接的にはある種の音しか知覚していなへど、間接的には馬車を知覚していふと論ふ)とがやあた。ある種の音と馬車が経験によつて結合していて、音が馬車を「示唆する(suggest)」からである。同様に、赤く焼けた鉄の棒を見ているとき、直接的には

その色と形が知覚され、間接的にはその固さと熱さが知覚されている。この間接知覚の説は『新論』の説を拡張したものである。間接知覚の説から言えれば、直接に知覚しているのは視覚観念にすぎないので、間接的には、奥行き、大きさ、位置という触覚観念を知覚している、と主張したのが『新論』であった。『対話』になると、直接知覚の対象が聴覚観念（音）で間接知覚の対象が視覚観念と触覚観念の複合体（馬車）という具合に他の種類の観念に及ぶことになる。赤く焼けた鉄の棒の例も、視覚観念と触覚観念の間でのことであるが、触覚観念の方は『新論』にはなかつた固さであり、熱さである。ただこのような間接知覚の説も対話篇の台詞として一度登場しただけで、充分に展開されることはなかつた。

### 三 経験と必然性

ロックはモリニユース問題を通して単にひとつの「経験」概念を示唆しただけではない。モリニユース問題が書き加えられたのは『知性論』第二版（1694）のことであるが、すでに第一版（1690）の段階でロックはこの「経験」概念を自身の知識論に取り込んでいる。<sup>(26)</sup>むしろ「経験」概念が自身の知識論に肝要だったがために、ロックはモリニユース問題を取り上げたとも考えられるのである。

ロックにとって、知識とは観念の一致不一致の知覚である（IV, xvii, 14～7）。観念を直接に比較できるとき、直観的知識が得られ、直接に比較できないときには、他の観念を介在させることによって論証的知識が得られる。そしてこの二種の知識のみが確実性を有していく、しかも厳密な意味での知識とされる。しかし比較という方法に基づかなくとも、経験を用いることで、知識に匹敵するものが得られる。例えば、『火は人間を暖め、鉛を液化し、

木や木炭の色とか固さを変える』とか、『鉄は水に沈み水銀に浮く』というような命題がそれである。これらの命題には蓋然性しかない。しかし、

「それらの蓋然性は確実性にきわめて接近しているので、最も明白な論証と同じく、絶対的に私達の思惟を支配し、同じく、完全に私達の行動すべてに影響を与える。そして自分達にかかることに於て、私達はそれらの蓋然性と確実な知識を殆ど、あるいは全く、区別しない。以上の様に根拠づけられた信念は確信に達す<sup>(27)</sup>」(IV, xvi, 6; cf. xv, 1, 5; xvii, 16, 17)

つまり経験は直観的知識や論証的知識の「確実性」を有すると間違われるほど緊密な観念結合<sup>(28)</sup>を生む。従つて、経験による観念結合は厳密な意味の知識と区別できないほどのものとなる。この意味で、ロックは「経験」概念を自身の知識論に取り込まさるを得なかつた。ただいゝでの「経験」は広く、「経験についての他人の証言」も含まられるが、しかしその点を除けば、知識論の「経験」とモリニョーラス問題の「経験」はほぼ等しく、ロックは知識論のゆえにモリニョーラス問題に着目したとも考えられるわけである。

ロックの「確実性」に位置するが、パークリでは「必然性」<sup>(30)</sup>になる。パークリは言う。

「また（視覚観念と触覚観念という）非常に異なつた観念の結合にひとつ同じ名前を与える理由を見つけることは、そういう観念の共在を経験する以前にいかにして可能なのか。あれこれの可触的性質とどんな色の間にも必然的結合があることを私達は見出さない。そして私達は、時には、触れるものがない所に色を知覚するかやしれない。」(『新論』§ 103)

要するに、視覚観念と触覚観念の間には経験による結合があるのみで、必然的結合といふものはない。さらに具

体的に「大きさ」についてバークリーは言っている。

「私達が外的対象に触れる前に、その様々な大きさをいま私達に示唆している観念はそのような大きさを示唆しなかつたかもしだれない。あるいはそれらの観念は全く反対の仕方で大きさを示唆したかもしだれない。それゆえ、私達はある観念を知覚してある対象が小さいと判断するが、その同じ観念が、『その対象は大きい』と私達に結論づけさせる役目を果たしたことも充分あり得る。」(§ 64)

「」いや「大きさ」を示唆する観念は視覚観念のみではなく、他に、眼球の向きからの生じる感覚(§ 16)、眼の緊張(§ 27)も、含まれる。あえて視覚観念を中心に言えば、視覚観念が、他の観念の協同のもとに、現に示唆しているのとは異なる可触的な大きさ(触覚観念)を示唆する」とも、また他の観念の協同にもかかわらず、可触的な大きさを全く示唆しないことも可能であった、ということになる。視覚的な大きさが、現に示唆している通りに触覚的な大きさを示唆しているのは、「全く習慣と経験の結果であり、外的で偶然的な状況に依存していふ」(§ 104)。」の「」とは、「大きさ」のみならず、一般に視覚観念と触覚観念について言われる(§ 45)<sup>(31)</sup>。つまり、視覚観念と触覚観念を結合する経験は反復によって形成されている。これはモリニュークス問題での経験の第三の特徴であった。また経験は視覚観念と触覚観念を緊密に結合する。そのために、触覚観念が視覚観念によって得られるという先入見、バークリーが言うには、「最も明晰な論証にも殆ど譲らないほどに私達の心になじみ、凝り固まって根深い先入見」(§ 146)が生じる。そしてその先入見のために、奥行き、可触的な大きさ、可触的な位置が視覚の対象であるかのようだ、触覚観念について様々な判断を行うことになる。つまり経験が判断を可能にする。これは経験の第一の特徴である。またバークリーは次の様にも言っている。

「私達が眼を開けば、奥行き、物体、可触的な形の観念が眼によって示唆されないことはない。可視的観念から可触的観念への移行があまりに速やかで急でしかも知覚されないので、私達は両観念を等しく視覚の直接対象だと考えわざを得なくなる。」(§145; cf. §17, 23, 24, 26)

視覚観念から触覚観念への移行は知覚されない、つまり経験の働きは気付かれない。これは経験の第一の特徴であつた。

要するに、先の三つの特性を持つ経験が、視覚観念と触覚観念の間に、必然的結合に迫る強い結合を産み出していくことになる。<sup>(32)</sup>

#### 四 経験と知識

視覚観念と触覚観念の必然的関係の分析などのために、バークリーは「経験」概念を活用した。しかしバークリーは「経験」概念について、必然性について語ることはなかつた。さらに言えば、経験および必然性が知識にとってどういう意義を持つか論じようとななかつた。つまり、ロックがしたこと、あるいはロックならしたはずのことをバークリーはしなかつた。それは、端的に言って、ロックとバークリーとでは「知識 (knowledge)」あるいは「知る (know)」の意味が違うからである。ロックは知識を観念の一致不一致の知覚と考えているのに対し、バークリーはそれは考えていないからである。

ロックも当初は「知識」を観念の一致不一致の知覚とは考えていなかつた。知識というのは物的あるいは心的存在についてのもの——いわば事物についてのものと考えていた。しかしそれらは（複雑）観念を通して知られる必

要がある。ところが観念がそれらの存在を完全にかつ充分に表してゐるかどうか知る」ことができない。つまり、知識を事物についてのものと考へる限り、懷疑論に陥る。恐らくのことに気付き、ロックは「知識」の定義を変更して、知識は事物についてのものではなく、観念相互の間に成り立つとしたようである。<sup>(35)</sup>

主著と目されている書物は『人間知識の諸原理に関する論考』(『原理』)であるが、バークリーに知識の定義を見出すことはややない。しかし『原理』の知識が事物の知識なのはほぼ明らかである。ところのむ、『原理』には知識を観念間のものと考へていた形跡は見当たらず、しかもバークリーは知識の対象を総称して「観念と精神」であると語っている(§86, 88, 89, 135, 145; 「運動について」§21)からである。無論バークリーはロックの知識論を知らなかつたわけではない。<sup>(37)</sup> バークリーがロックの知識論を知つた上で知識を観念の一致不一致の知覚としなかつた。それは『評註』や『原理』述論の第一草稿といった下書きに窺える。

『言辞的命題 (verbal proposition)』と『心的命題 (mental proposition)』によるロックの区分 (IV, v) についてバークリーは『評註』に次の様に記している。

「Mo は種類の命題である。

Gold is a Metal,

Gold is yellow;

Gold is fixt,

$\wedge$  Gold is not a stone.

以上のうち第一第一第一のものは言辞的命題にすぎず、それらに対応する心的命題を持たない」(793)

「Gold is not blue の様な非共在 (non-coexistence) の命題についても同じことが言えね。」(793a)

言辞的命題といふのは、「肯定文あることは否定文で否わせたり分けられたりしていふ言葉、即ち観念の記号」であり、心的命題といふのは、「私達の知性のうちにある観念が、言葉の使用なしに、観念の一一致不一致を知覚する心によつて合わせられたり分けられたりしていふ命題」のことである (IV, V, 5)。心的命題を形成するには二つの観念が必要である。しかし、793 の最初の三つの命題については、バークリーの抽象観念批判からして、ひとつの個別観念しか形成されず、心的命題が形成できない。それゆえ、ロックの知識の定義に従えば、三つの命題は知識として成り立たないことになる。つまり、知識を観念の一致不一致という命題の形で考えねば、バークリーは意義を認めなかつた。第四の 'Gold is not a stone' といふ命題については、793 のメントである 793a の 'Gold is not blue' の様に心的命題が形成できない、とバークリーは考えたかの様である。<sup>(38)</sup>

『原理』序論の第一草稿になると批判はより明確になる。そこでバークリーは 'Melampus is an animal' といふ命題を取り上げてゐる。Melampus といふのはある特定の犬の名前である。「観念の一致不一致によつて命題を理解する」ロックであれば、この命題を個別観念と抽象（一般）観念の一致と見るはずである。しかしぶークリーはそうは見ない。

「おたそれ (animal といふ言葉) はその命題ではいかなる観念も表していない。私がそれによつて意義しようとしつけるのは、私が Melampus と呼ぶ個別的な事物は animal と呼ばれる権利を持つことによつて (39) ない。そして私はどの人もこの易しい試みを行つてみると懇願する。どの人もただ自分の思惟から命題の言葉を追いかけて、一方が他方に一致する」とを見出せるような二つの明晰で明確な観念が自分の知性のうち

に残るかどうか見てみると、‘Melampus is an animal’ から論理を全く考へないとやむと、私の心のうちにはたゞたひとつの裸で曝し出された観念、つまり私が Melampus という名前を与えていた個別観念しか残らないことを、私は明らかに自分自身のうちに知覚する。」(p.136)

「矛盾でかゝ不整合」であるゆえに、抽象一般観念は心に形成されない、というのがバークリーの意見である。たゞするも、‘Melampus is an animal’ の ‘Melampus’ が表す観念は存在するけれども、それとは別に ‘animal’ が表すものとの観念は存在しない。つまり、‘Melampus is an animal’ という言辞的命題はひとつの観念しか表さない。従つて観念の一致不一致を要求する心的命題は形成できない。これが、バークリーがロックの知識を受け入れなかつた理由の最たるものだと思ふ。<sup>(40)</sup>

ただ、『原理』序論の草稿ではこの様に心的命題の批判を展開しながら、公けになつた『原理』序論にはそれに該当する所がない。それは多分バークリーの関心のありかのせいである。『諾証』には次の様にある。

「M 事物は観念と別個であるという想定はすべての本当の真理を追い払つてしまふ。そしてその結果、全面的な懷疑論 (Universal Scepticism) をもたらす。たゞのめ、かくしての私達の知識と思考は私達自身の観念のみに制限されてしまうからである。」(606, cf. 『原理』§86, 87, 88, 133)

バークリーは観念「の外に (without)」物質を認めたくなかった。認めれば、神の創造説に抵触する。物質が無から創造されたとは考へ難いので、神の創造以前の永遠の昔から物質が存在するとなれてしまふからである (『原理』§92)。しかし私達は観念の世界の外に出ないがならないので、観念が正しく物質世界を写しているかどうか知る」とがでぎたくなり、懷疑論に陥る。つまり、『知識は観念についてのものである』という命題と『観念の外に

物質が存在する』という命題を併せて支持することで、懷疑論に陥る。懷疑論は聖書の真理を脅かす。このような宗教的観点から、バークリーは懷疑論に重大な関心を持っていた。そして「知識は観念についてのものである」という命題を採り『観念の外に物質が存在する』という命題を捨てるに至って、懷疑論を防ぐうとしていた。そのためにもはや知識と観念より他に注意が注がれなくなつて、(41)『評註』522, cf. 312, 378、公けの著作では「観念の一致不一致の知覚」であるというロックの知識の定義に対するひとつの批判、即ち心的命題に対する批判が消えてしまつたのではないか。

あらゆる事柄について私達は確実な知識を持つてゐるわけではない。人間の諸機能は「生活の用 (the use of the life)」に適えば充分であると、ロックは言へ (IV, xi, 8, 10; xii, 11; xiv, 1, 2; cf. 『原理』§31)。蓋然性 (IV, ix, 8~10)、そして経験はそのためにある。(42)視覚観念と触覚観念の結合もやがて「生活の用」のためのものである。いうのも、私達の身体に利害を及ぼし、快苦を与えるのは殆どが触覚観念であり (『新論』§59, 147)、触覚観念を知覚する前にあらかじめ触覚観念について教えてくれるのが視覚観念だからである。確かに、視覚観念と触覚観念は同じ名前が当てがわれているので、言辞的命題が形成できず、それゆえに両観念の結合はロックの知識にはあてはまらない。しかし、視覚観念と触覚観念の結合も、ロックの言う知識と同じ様に、観念相互の関係である。従つて、ロックの知識の定義を拒否しなければ、『新論』の綿密な分析を生かして、一般的に、経験について、必然性について、そして蓋然性について論じる道がバークリーに開けていたかも知れない。換言すれば、『新論』の心理学を哲學的に整理できていったかも知れない。(43)またロックの知識の定義は、良し悪しは別にして、バークリーの観念論とも不整合にはならない。(44)結局、必然性、蓋然性、経験についての一般的な議論は、再び知識を観念の関係と考えたヒ

## 注

- (1) 使用したテキストゼロッハ『人間知性論 (An Essay Concerning Human Understanding)』(大槻春彦訳『人間知性論 岩波文庫一九七一—一九七九年) (『知性論』)、マーケ『「知識論註 (Philosophical Commentaries)』(『論註』)、『原理序論』(第1草稿 (First Draft of the Introduction to the Principles)』、『知識新論 (An Essay Towards a New Theory of Vision)』(『新論』)、『人間知識の諸原理に關する論述 (A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge)』(大槻春彦訳『人間知性論 岩波文庫一九五八年) (『原理』)、『ハイトヘルト・ロルクの「III」の來説 (Three Dialogues Between Hyles and Philomous)』(『亥論』)、『運動論 (De Motu)』や等の『冥遊』『論註』『新論』『原理』『運動論』は篇番付等の記述を除くと、それ以外の篇付など A. A. Luce and T. E. Jessop (eds.), *The Works of George Berkeley* (London, 1949—58) に従った。
- (2) *The Encyclopedia of Philosophy*, Empiricism (D. M. Hamlyn) p. 502.
- (3) ベークの命題は「ロックだけではない」、アーヴィングは「論註はなく」。『原理』の序論の本論が対照的である。序論ではロックの抽象観念説が批判され、これに対し、本論では物質論一般が批判される。
- (4) R. I. Aaron, *John Locke* (Oxford, 1971), pp. 96, 107, 110.
- (5) Aaron, ibid., p. 114.
- (6) 現在 'sensation or idea' として一括りが『原理』に頻出する。J. W. Yolton, 'Locke's Concept of Experience', in C. B. Martin and D. M. Armstrong (eds.), *Locke and Berkeley* (London, 1968) p. 45.
- (7) 抽象的ではなく、個々の事物の存在を考察した。『論註』597、拙註『物質論批評 esse is percipi』(「知性論註」第九号掲載) 参照。
- (8) ロックは感覚と知覚を区別している。つまり、気付かれた感覚が知覚であるのに対し、気付かれない感覚は知覚でない (II, ix, 3; cf. 4)。しかし、観念の源となり得るのは前者である、後者ではない。それゆえ、ロックの「感覚」はベークの知覚に相当する。

(9) 『新論』279'『原理』§3°

(10) II, ix, 8. ロックの「錯覚」はそれなりに他の意味あるのかかもしれないが、ロックの「錯覚」の意味を取ってやるが本論の題名ではない。三ヶ月は杞憂の心の作用を意味している。Yolton, *ibid.*, p.50.

(11) 知識論との関連について Aarón, *ibid.*, pp. 248~9 参照。

(12) それがまた記憶による判断と経験による判断を区別している。たゞだい、錯覚による判断が経験によるものよりは気がつかれないものだが、記憶による判断が記憶によるものよりは気が付かれないことはさうがだらうがどうだね。I, iv, 8. cf. D. Hume, *A Treatise of Human Nature*. L. A. Selby-Bigge (ed.), revised edition (Oxford, 1978), p.103~4, 92.

(13) §44. G. Pitcher, *Berkeley*, (London, 1977), p.26.

(14) cf. *ibid.*, pp. 26~7.

(15) 『新論』第111節を境として、やがてが豆の議論、それ以後が(5)の議論にならぶ。

(16) cf. Pitcher, *ibid.*, p.54.

(17) 原文は、「隠密に聞えども私は様々の陰影の変化を伴った光と色以外の何を思な」である。もとより回歸では esse と percipi の抽象不可能性を論じるが、仕方で、色と可視的延長の抽象不可能性を論じる。

(18) いの詮明の問題点は Pitcher, *ibid.*, pp. 54~5 参照。

(19) ラトナーの議論(6)の詮明のあとで、ラムゼーの詮明を指摘して、(5)の詮明は論じてある。Pitcher, *ibid.*, pp. 53~8.

(20) 視覚対象と触覚対象を数的かつ種的に分離して、バークリーの発想自体ロックの観念説が来る。しかし、この純粋論的五つの感官の固有の対象 (proper objects) に対する前提がロックの観念説をもつて、心の対象、(5)の源を見出せん。distance も、『新論』第111節で論じてある。

(21) 原語は、distance も、『新論』第111節で論じてある。

(22) 同第五七~八七節で、moon illusion も廿二で論じてある。

(23) 同第八八~一〇〇節で、獨立像を廿二で論じてある。

- (24) 「ベークリーは、モリヌークの問題の検討が網膜の倒立像の問題ひなが ひじら  $^{\circ}$  M. J. Morgan, *Molyneux's Question* (Cambridge, 1977), pp. 61~2.
- (25) Aaron, *ibid.*, p. 135.
- (26) 『知性論』の構成ところの観点がひじれば、第一巻でセリニュークス問題によつて「経験」概念を示唆し、第四巻でそれを自身の知識論に取り込むといふ恰好になつてゐる。
- (27) ロックは自然の齊一性を認め、そして自然が齊一的なのは神のせいだといふ。ただ、私達は自然の齊一性について「経験的な知識 (experimental knowledge)」しか持たない (IV, iii, 30)。
- (28) あわめて高い蓋然性の知識を有するための主観的状態が「確信 (assurance)」である。より低い状態もロックは整理してゐる (IV, xvi, 7~9)。
- (29) 「II, xxxiii やび、ロックは観念連合を正常でない推理にしか適用してゐない。」 Aaron, *ibid.*, pp. 141~6.
- (30) 実体にふたつ性質が共存しているかを知るのは、性質の観念の結合を経験するにあらず、性質の観念の必然的な結合は知ることができない、とロックは言つて (IV, iii, 14; cf. IV, iv, 12)。ロックがその言つても、観念間に必然的と間違われるほどの強い結合を経験が生むかのではなか。ロック自身、図 ひやく 実体に「確かな知識 (certain knowledge)」を得られると言つてゐる (II, xii, 9)。同じロバートの第一版 (IV, iii, 16) で経験を強調してゐるのも注意すべきである (cf. IV, xii, 9)。また心身の間に「恒常的や規則的な結合」はあるが、必然的なものはない、とロックは言つてゐる。
- (31) 「可触的四角には可視的より可視的四角の方がややわらかい点が、ベークリーにも合理論的因素は残つてゐる。」
- Aaron, *ibid.*, pp. 135~6.
- (32) 先に引用した『新論』第一〇三、一〇四節で言及されてゐる。
- (33) 視覚観念と触覚観念の結合は単に強力なだけではない。結合の仕方にひじても、個人間のみならず、民族間、国家間に差異はない。要するに、結合の仕方は普遍的と言える。そう言えるのは、ベークリーによると、視覚観念が神の言語だからである。つまり視覚観念は「記号」であり、触覚観念はそれによつて「意義されるもの」なのである (『新論』 § 143, 144, 147, 148, 152)。しかしながら、視覚観念といふところの触覚観念が結合するかはあくまでも人間の経験に依存する。なぜ結合の

- (34) *Draft A of Locke's Essay Concerning Human Understanding*, transcribed with Critical Apparatus by P. H. Nidditch (Sheffield, 1980). Aaron, *ibid.*, pp. 227~8, cf. p.224, 227.

(35) ローハミッド曰く、「知る」の残りての「知る」は「自我、神、可感的事物」である。  
(*ibid.*, pp. 244~7)。

(36) ただ「バーティ」は「観念を知る」の「知る」も「體験を知る」の「知る」も意味が違うと唱へる(『原理』§142)。

(37) 『論述』312, 378, 522, 606, 666, 720, 730, 730a, 739, 793, 793a, 883.

(38) 以上の命題が述べた通りの體験の不一致にたどりだるのか明白だ。ゆえに、その前のいふに特別な意味があるのかもこれだ。cf. 53, 53a, 429, 429a.

(39) ローハミッドの「知性論」では、1つの抽象概念を結んだ場合と、もう1つの意象を結ぶ場合(IV, viii, 12)。

(40) 草稿の段階では、「バーティ」は知識を命題と考へて、これに付随する(『論述』720)。また『原理』序論にもローハミッドの知識の痕跡のようだものがある(§22)。

(41) 知識を觀念の關係と考へたバーティ、それが觀念に依るのをやめた際は、ローハミッドは懷疑論を免れだ。Aaron, *ibid.*, pp. 237~40. cf. J. D. Mabbott, *John Locke* (Macmillan, 1973), pp. 90~1.

(42) 「體験」より「體験の理性」の所産である。理性の權利を縮小した經驗論者に全く理性から由来するわけではなかつた。おまかで「體験」の使用は「新論」の業績を見えづらわせてしまうのであって、Pitcher, *ibid.*, pp. 29~34. esp. p. 32. だ。

だよ、ローハミッドの「理性」が広く probability と呼ぶべき(IV, xvii, 2)。

(43) 因果論によれば、sign-signified の位置で位置づけられる。『原理』§65, 66.

(44) 「ローハミッドの知識論と經驗論は不整合だよ。」Aaron, *ibid.*, p. 224.

付記 本稿は日本哲学会第四十六回大会（一九八七年五月二十三、二十四日慶應義塾大学）に於ける一般研究発表に加筆したものである。